

## 「自然体が一番」

「社内学校」

平成20年12月26日

(株)エモーション 代表取締役 香川湧慈

事業についても採用についても、自然体で臨むとはどういうことか。  
私の持論は「攻め以外に勝利なし」攻めるとは、思う一点に全力投球する事。  
と考えている。が、その時に陥りやすいのが、「自我」が出ることである。

今を遡ること800年前偉大なる哲学者であり、達人であった「道元禅師」は  
自書「正法眼蔵」の中で、

「自己を運びて万法を修正するは、迷いなり。

万法運びて自己を修正するは、悟りなり。」と言った。

「自己を運びて」とは、自分から進んでという意味。その時「自我」が出るのである。自分が、あぁしたい、こうしたい。と自我から発生し環境を整えて行こうとする事を道元は「迷い」であると言うのである。

「万法運びて」とは、自然と環境が整って来ることに縁を感じて、自分自身を修正、整えて行くことが「悟り」であると言った。

つまり、己のやるべき役割を自覚して、その役割に一点集中、全力投球していると、環境の方から準備が為されて来るのだと思う。その時に、自身を整えて行こうと冷静に考えて「来ている事象」をやるか、やらないか。を決めて行けば良いのだと考える。

採用の失敗は教育では、取り返すのが大変困難だと思う。つまり、手が足りないから安易に採用することは、すべきでないと考える。

しかし、常に自社の強化しなければならぬ部署を念頭に置いて、役割に全力投球していれば、環境の方からやって来るのだと思う。

これを「巡り合わせ」と呼ぶのだろう。そして、その巡り合わせてくれた事象に自己を、そして自社を整えて行く努力をする。

これを自然体の経営と香川湧慈は定義する。

昔、友人の建築デザイナーが話していたが、施主の望む家を設計するに当たっては、数年掛けて施主と付き合う。イメージが出来上がっていると、数年のうちにイメージに合う材料と出遭うことがある。すると、自腹を切って購入しておくのだそうだ。そうしないと、施工時に、その材料が手に入るとは限らないから。と言っていたのを思い出す。

人の採用も同じと思う。巡り合わせがあった時、将来は必要で、今すぐは必要でないにしても、巡り合った時に自己を整えてみて、この人材は自社の体質に合うと判断すれば、先行投資すべきである。

過去を振り返ると、会社の将来のためと思い、いくつかの新規事業を試みたが、これも、「自己を運びて、万法を修正する。」だったのだろう。

が、結果として考えてみると、お金の損失は倒産寸前まで行く多大なものであったが、体質改善になったことは、バカボンのパパの心境に成れ、良かったと思う。つまり、すべて（都合の良い事も都合の悪い事も）をひっくるめて

「これで、いいのだ！！」の心境である。

「会社は家族」という思想で創業以来邁進して来た。会社に於ける家族とは、血縁を言うのではなく、「信頼の絆の結び付き」を言うのである。

つまり、「魂の結び付き」を真の家族と言うのである。

社長が父親、幹部が母親、社員は兄弟姉妹。

家族に「権利と義務」の思想は無い。有るのは「責任と感恩」の関係である。責任感と感謝する気持ち、恩に感じる気持ちの関係である。

「権利と義務」を全く否定するのではない。「これだけするから、これだけ欲しい。」は当然のことではあるが、この関係だけでは、人間余りにも侘し過ぎるのではないか。会社は、給料と労働の交換的存在には変わりはないが、それだけなら、人間生きる価値が消滅する。

良い会社＝家族とは、社長＝父（チチ）の志を、幹部＝母が乳（チチ）として社員＝子に飲まし、社員がお客さんにその志を発信している状態を言う。

そして、和やかな人間関係の中で各々が自分の果たすべき役割を「自覚」して、自主的に伸び伸びと働いている状態を言う。

また、違う種類の失敗は重ねるべきである。血となり肉となり、体力が付くから。が、同じ過ちは重ねてはいけない。同じ過ちをするという事は、反省心の無い証拠である。

この違う種類の失敗の積み重ねから、社長は学ばねばならない。

そうすることで、先を見通した経営戦略が立てられるのである。根っこである理念が確りし、本業である幹が強固になり、本業から派生した枝葉が伸びて行くのである。そのために、社員に理性的納得と感情的納得の合意を得て行かねば、功を奏さないし、社員もやり甲斐が持てなくなるのである。

つまり、統率する者が、先ず自分との戦いに勝ち、迷いの無い指揮をする。

そして、部下は各々のポジションに於いて工夫、探究をして腕を磨くことに徹することで、すべてが「これで、いいのだ！！」に成れるのである。

縁あって集った会社という家族で、充実した人生を創って行くことが、人間の最大の喜びに成ると考える。何故なら、生涯を通して人間は働いて生きる時間が一番長い訳だから、その働く場所に充実が無ければ、何の為の人生であろうか。そこに充実が生じているから、実際の家庭生活にも好影響が出るのではないだろうか。

社長はじめ、社員全員が自分の「人生曲線を描く」ことが大切。人生曲線とは、自分の理想を掲げ、志を堅固にし、何歳までに、どのような勉強をして、どのような仕事をし、理想の実現を図るのか。

各々の会社に於ける「我が社の理想」とは、実現の為に、何を基幹事業とするのかを堅固にする事。新しい発想を生み育てる事。

その為に、如何なる経営方針を執り、社員をどう教育するかを考えることが、社長の仕事である。人を教育することは即ち自分を育てることに繋がるのである。まさに「共育」なのである。

人は、人として過不足なく具わっている機能を最大限に生かし切れれば、最大の能率を上げられるはず。要は、在るものを在るがままに見、在るものを在るがままに活かすことである。真理は極、平凡なものである。これを我が身に素直に受け入れて全身全霊を働かせて創造的な生活を送ること。各々が異なる形と価値を持ち、調和の取れた会社を形成することに努力することが充実を生むのである。

目的に進む為には、必ず足元を照らす術が大切になる。実行可能な方策を立てることが肝要である。指揮者は、目的までの道のりが見えていないといけない。そして、己の中に確りとした核を持たない限り、人を統べることは出来ないのである。

上に立つ者が、自分の役割を自覚することで、己が澄んで来るのである。

そうすると、社員も「これでいいのだろうか。」と反省が生まれて来る。

社員は常に上に立つ者を見ているからである。

常に、今が始め。思い立った時が機縁（キッカケ）。

反省した後は、振り返らないこと。

殆どの多くの人々は、一番自分自身の解決が、しにくい問題である。

次に、家族の解決。そして、外部の解決である。

今の仕事に全力で取り組んでいると、道が拓けて来る。

結果が出れば、何の為に生きるのかが、見えて来る。

結果が出なければ、新しい機縁が生じて来る。

今の仕事に全力を出さずに、どこか他に道があるんじゃないだろうかと迷っていると「間」が出来る。「間」は「魔」である。

一つの事が全う出来ない者は、何をやっても出来ない。

「魔」が生じるからである。

つまり、「志」を立てれば、全力で事に当たれる。

一念無想で取り組めるものである。

そして、機縁が出来て来る。環境が整って来るのである。

そうすることで、自然体で生きれるように段々と成って来るものだと思う。

宇宙の真実の姿は無我（我が無い状態）の結合である。

だから、因縁（巡り合わせ）に作為（自我）が加わると不幸が生じるのである。

自然体で無いからだ。

また、相性の合う人間どうしの仕事は、捗り易い。

しかし、相性の合わない人を合うようにするところに、苦悩がある。

そして、向上があるのである。

その為には、「対機説法」が出来なければならない。

「対機説法」とは、相手に応じた話しが出来ることを言う。

つまり、起こる現象を全て受け入れる器量を養い、より高い見識を具える努力を生涯実践し続けることである。

最後に、自由には二つの意味がある。

西洋の自由は、選択の自由。（どちらかを選ぶという自由）

日本の自由は、自由自在につながるもの。

自（おの）ずから由（よ）る。という意味。己が己に生きることを自由と言う。

つまり、他人に依（よ）らず、自分が自分を生きることを「自由」と言うのである。

だから、自然体で生きている人を自由な人と言う。

自然体が一番。起こる現象を全て受け入れる器量を養い、より高い見識を具える努力を生涯実践していることで、自然体に成れるのである。